

(報告) 佐賀自然史研究会第 32 回総会・会員発表会

第 32 回総会・会員発表会を 2025 年 2 月 8 日に佐賀大学で開催しました。概要と検討した内容は以下の通りです。

日時：2025 年 2 月 8 日(土) 13:00~17:00 (受付 12:30~)

場所：佐賀大学農学部大講義室 (佐賀市本庄町 1) (佐賀大学農学部共催)

1. 第 32 回総会 13:00~13:50

(1) 開会

(2) 会長挨拶

(3) 議事

①2024 年度会務報告—————【資料 1】

②2024 年度決算報告—————【資料 2】

③監査報告—————【資料 3】

④2025 年度会務計画—————【資料 4】

⑤2025 年度予算審議—————【資料 5】

⑥その他—————【資料 6】

(4) 閉会

2. 撮っておきの 1 枚 14:00~14:20

3. 会員発表会 14:30~17:00 【資料 7】

(1) 有明海の伝統漁法で有明海の生き物を調べる

平井亨太・佐藤柊人・矢川慎一郎 (鹿島高校)

(2) 東よか干潟におけるマクロベントス群集と底質環境

郡山益実 (佐賀大・農)

(3) 有明海産二枚貝類の海の貧酸素化に対する耐性評価

折田 亮 (佐賀大・農)

(4) 多良山系におけるヤマネの活動の季節性：10 年間の自動撮影カメラデータの解析

山崎華子¹・矢野文士²・徳田 誠^{1,2} (¹佐賀大・農, ²鹿児島連大)

[※休憩・展示閲覧時間 30 分]

(5) ジョロウグモの天敵と個体群密度制御要因 (予報)

山佐啓斗・徳田 誠 (佐賀大・農)

(6) 佐賀のトンボ —ここ 30 年を振り返る—

大石 寛貴

(7) カジカガエルと共に 35 年

吉田 喜美明

(8) 佐賀平野の水草 30 年間の推移～絶滅危惧種と外来種を中心に～

上赤博文

＜資料 1＞2024 年度会務報告

(1) 第 31 回総会・会員発表会（佐賀大学農学部と共催）
2 月 10 日（土）13:00～16:45 ハイブリッド開催

(2) 観察会

- ・ 第 89 回「ため池の自然を散策しよう」6 月 1 日（土）
参加者：会員 21 名（+西神野子ども会 9 名）
- ・ 第 90 回「有明海の干潟の生き物を観察しよう」7 月 20 日（土）
参加者：会員 36 名（+西神野子ども会 18 名）
- ・ 第 91 回「脊振の山里，一谷の自然を考えよう」9 月 15 日（日）
参加者：13 名

(3) ニュースレター発行

第 118 号（1 月），第 119 号（5 月），第 120 号（7 月），第 121 号（8 月）

(4) 会誌「佐賀自然史研究」第 30 号

2024 年に発行予定でしたが一部の原稿の編集作業が継続中です。完了次第出版の予定です。

＜資料 2＞2024 年度決算報告（後出）

＜資料 3＞監査報告（後出）

＜資料 4＞2025 年度会務計画

(1) 第 32 回総会・会員発表会（佐賀大学農学部と共催）

日 時：2025 年 2 月 8 日（土）

場 所：佐賀大学農学部大講義室

【参考】第 33 回総会・会員発表会は 2026 年 2 月 14 日（土）の予定

(2) 第 92～94 回観察会

それぞれの回の担当者より、観察会の見どころ等の案内がありました。

第 92 回 佐賀県初の自然共生サイト・横枕で生き物を探そう

日 時：2025 年 5 月 18 日（日）10:00～12:00

場 所：唐津市横枕

キーワード：自然共生サイト，植物，昆虫，両生類，生物多様性

第 93 回 佐賀平野のため池の藻類を観察しよう

日 時：2025 年 8 月 2 日（土）10:00～12:00

場 所：佐賀大学農学部生物学実験室（佐賀市）

キーワード：佐賀平野，ため池，藻類

第 94 回 春日溪谷の秋の自然を堪能しよう

日 時：2025 年 10 月 4 日（土）10:00～12:00

場 所：嬉野市春日溪谷

キーワード：里山，溪谷植生，絶滅危惧種，生物多様性，ヤマネ

(3) ニュースレター発行

122 号（1 月），123 号（4 月），124 号（7 月），125 号（9 月）

(4) 会誌発行

「佐賀自然史研究」第 30 号，第 31 号

<資料2>2024年度決算報告 <資料3>監査報告

佐賀自然史研究会 2024年度決算 (2月31日現在)

収入

予算		決算	
費目	金額	金額	摘要
繰越金	173,518	173,518	
会費	377,000	299,000	一般53名、学生1名、賛助3名
雑収入	5,000	90,522	会誌売上、利息、佐賀市環境調査からの寄付金
特別会計より	100,000	100,000	特別会計より繰り入れ
合計	655,518	663,040	

※会員127名 2023年1月1日現在)

支出

予算		決算	
費目	金額	金額	摘要
通信費	40,000	17,601	印刷物発送, ハガキ, 切手等
ニューズレター・封筒印刷費	20,000	0	
会誌印刷費	450,000	0	30号印刷費
観察会 総会資料代	4,000	4,000	観察会 3回、総会1回
運営委員会経費	3,000	3,000	紙, プリンターインク等
事務局経費	3,000	3,000	紙, プリンターインク等
会誌 NL編集費	13,000	13,000	会誌10,000円, NL3,000円
ホームページ維持費	2,121	2,121	年間契約料 値上げ)
ホームページ管理費	3,000	3,000	HP管理
事務費	10,000	5,581	観察会保険など
予備費	107,397	0	
合計	655,518	51,303	

繰越金 (収入決算－支出決算) 611,737

特別会計 (出版物売り上げを積立てたもの)

費目	支出	収入	摘要
繰越		629,160	
利息		37	
一般会計へ	100,000		
合計	100,000	629,197	

収入－支出 529,197

監査の結果

2024年度の会計については、領収書、帳簿等適正に処理されておりました。

令和7年1月20日

原口 祐子 

<資料5>2025年度予算審議

佐賀自然史研究会 2025年度予算(案)

収入

費目	2025年度	2024年度	増減	摘要
繰越金	611,737	173,518	438,219	会誌30号の印刷費を含む
会費	379,000	377,000	2,000	128名(一般117名、学生4名、賛助2名)
雑収入	5,000	5,000	0	会誌売上・利息など
特別会計より	0	100,000	△ 100,000	
合計	995,737	655,518	340,219	

会員128名(2025年1月1日現在)

支出

費目	2025年度	2024年度	増減	摘要
通信費	40,000	40,000	0	印刷物発送, ハガキ, 切手等
会誌印刷費	750,000	450,000	300,000	会誌30号は45万円, 会誌31号はモノクロで30万円
観察会・総会資料代	4,000	4,000	0	1,000×4
運営委員会経費	3,000	3,000	0	紙, プリンターインク等
事務局経費	3,000	3,000	0	紙, プリンターインク等
会誌・NL編集費	13,000	13,000	0	会誌10,000(含通信費)、NL3,000
ホームページ維持費	2,121	2,121	0	サーバー年間契約料
ホームページ管理費	3,000	3,000	0	ホームページ管理
事務費	30,000	10,000	20,000	文具類, 会議費, 観察会保険等, 封筒印刷費
予備費	147,616	17,617	129,999	
合計	995,737	545,738	449,999	

特別会計(出版物売り上げを積立)

	支出	収入	摘要
繰越		529,197	
一般会計へ	0		
利息		5	
	0	529,202	

繰越金(収入-支出)

529,202

<資料6>その他

1) 役員の変更について

今年度は役員改選の年ではありませんが、退任希望の方がいらっしゃいましたので以下のような変更を提案し、承認されました（変更箇所：太字下線）。

役員（2024-2025年度）

<顧問>岩村政浩・茂木幹義・副島和則

<会長>上赤博文

<副会長>鶴田靖雄

<運営委員会>

運営委員長：徳田 誠

運営委員：伊藤辰徳（退任）・嬉 正勝・上赤博文・大石寛貴・喜多章仁・郡山益実・辻田有紀・鶴田靖雄・出村幹英（新任）・徳田 誠・中村さやか（新任）・滑川喜生（退任）・藤井俊介・前田修之・山口誠治・山崎 工・矢川慎一郎

<監査委員>：飛松千陽・原口祐子

<編集委員会>

編集委員長：伊藤辰徳（退任）・辻田有紀（新任）

編集委員：上赤博文・喜多章仁〔・辻田有紀（編集委員長へ）〕・郡山益実（新任）・鶴田靖雄（新任）

<事務局 兼 会計>矢川慎一郎

<ニュースレター> 滑川喜生（退任）・喜多章仁・大石寛貴（新任）

<HP管理>鶴田靖雄・山崎 工

※会誌の原稿投稿先の変更：役員変更に伴い、今年度から会誌の原稿は以下のアドレス宛に投稿してください。

ytsujita[a]cc.saga-u.ac.jp （[a]を@に変換してください）

2) イベント等での団体名の使用について

各種イベントで本会を共催・後援・協力などに含めたい場合、必ず事前に事務局に連絡してください。名称使用の可否について運営委員会で審議しますので、イベント開催日の1ヶ月以上前には連絡するようにしてください。

3) 会誌のカラーページ印刷費の実費負担について

ここ数年、印刷費が会費収入を上回る状態が続いており、会計を圧迫しています。会誌31号からはモノクロ印刷を基本とし、カラー印刷を希望する著者には実費負担をお願いすることとさせていただきます。

4) 佐賀市自然環境調査について

佐賀市環境政策課からの依頼により、令和5年度から3年間の計画で実施中です（毎年度のべ20地点（各分類群4地点前後）で春・夏・秋の3回調査）。調査対象の分類群と責任者は以下の通りです。

哺乳類：徳田，両生爬虫類：伊藤，陸上昆虫：喜多，魚類：藤井，水生昆虫・底生生物：藤井。（参考：植物は佐賀植物友の会，鳥類は日本野鳥の会佐賀県支部が実施。）

詳細については、事務局または各分類群の責任者にご確認下さい。

5) 西神野子ども会との連携：今年度も要望があれば連携予定です。

6) 神野公園保全活動（NPO法人 SATOMORI 主催）：今年度も6, 7, 10月に実施の見込みです。

＜資料7＞会員発表の演題・発表者・要旨

1. 有明海の伝統漁法で有明海の生き物を調べる

平井亨太・佐藤柗人・矢川慎一郎（鹿島高校）

有明海には多種多様な生物が存在しており、食用として利用されてきた。生物の採集方法も、生物の特徴に応じていろいろな方法が用いられてきた。今回、有明海の伝統的な漁法であるウナギ塚と棚ジブを用いて、有明海の生物を調査したので報告する。

道の駅鹿島の隣にある音成川の河口にウナギ塚を3つ作り、どの位置のウナギ塚にウナギが良く入るのかを調べた。また、道の駅鹿島に設置されている棚ジブを借りてどのような生物が捕れるのか、満ち潮と引き潮のどちらが良くとれるのかを調べたので、その結果を報告する。

2. 東よか干潟におけるマクロベントス群集と底質環境

郡山益実（佐賀大・農）

東よか干潟は、国内最大級の泥干潟であり、泥干潟特有の希少な生物が多く生息している。本研究は、干潟の保全・有効利用や干潟生態系の解明を前提に、東よか干潟のマクロベントス群集の経年変化を明らかにすると同時に、群集構造と底質環境、特に底質硬度との関連性について検討、考察した。その結果、対象干潟におけるマクロベントスの個体数や網組成の中長期的な変化が明らかにされ、それらの変化は、巣穴底生生物の重要な住環境指標の1つである底質硬度の変化と関連することが示された。

3. 有明海産二枚貝類の海の貧酸素化に対する耐性評価

折田 亮（佐賀大・農）

地球温暖化に伴い、海水中の酸素濃度が低下する「貧酸素化」海域の拡大が世界各地で進行している。二枚貝は移動能力が乏しいため貧酸素化に対しては耐え抜くしかなく、どのような種がどれくらい耐えられるかの知見は保全や生物群集の変化を考える基盤となり得る。従来の貧酸素耐性評価手法は、煩雑で手間がかかるため、様々な種の耐性情報を迅速に蓄積する点に課題があった。本発表では、新たに簡易評価手法を確立し、有明海準特産種や絶滅危惧種の貧酸素耐性を評価した結果について紹介する。

4. 多良山系におけるヤマネの活動の季節性：10年間の自動撮影カメラデータの解析

山崎華子¹・矢野文士²・徳田 誠^{1,2}（¹佐賀大・農，²鹿児島連大）

多良山系のヤマネは九州山地などの主要個体群から隔離されており、遺伝的多様性保全の観点から重要とされる。演者らは、同地におけるヤマネの季節性や年次動態を明らかにするため、2014年から自動撮影カメラと巣箱を設置して調査を続けている。これまでの10年分のヤマネ撮影データを用いて気温やカメラ設置場所と活動性の関係を調べたところ、撮影頻度は春と秋に増加し、夏には減少することや、春には川沿いでの撮影頻度が増加し、秋にはそれ以外の場所での撮影頻度が増加する傾向があることが判明した。

5. ジョロウグモの天敵と個体群密度制御要因（予報）

山佐啓斗・徳田 誠（佐賀大・農）

近年、アメリカのジョージア州にジョロウグモが侵入し、生息地を拡大して問題となっている。本種は日本でもっとも身近なクモの1つであるが、その密度制御機構については断片的な情報しかない。国内における個体群密度制御要因を明らかにするため、佐賀県内の5地点において卵嚢期から成体の産卵時期までの個体数変動や死亡要因を調査した。その結果、個体数の減少率や減少が顕著な時期は地点によって異なり、死亡要因としてヨコヅナサシガメやスズメバチによる捕食や台風などが挙げられた。一方、卵寄生蜂は確認されなかった。

6. 佐賀のトンボ —ここ30年を振り返る—

大石 寛貴

佐賀市が「トンボ王国・さが」づくりに着手してから30年以上が経過した。佐賀のトンボを取りまく現状は、時の経過に伴い確実に変化している。佐賀平野を流れる河川や用水路、クリークには、全国的に希少とされるトンボがごく普通に生息していたが、2000年代に入りその数は減少傾向にある。本発表では、過去の文献記録や筆者のフィールドでの経験を踏まえながら、佐賀県のトンボの現状と約30年の間に起こった変化を概観する。

7. カジカガエルと共に35年

吉田 喜美明

嘉瀬川沿いに、タムシバの純白の花が咲き始めた薄暮時になると、清流の中から物静かなカジカガエルの鳴き声が木霊する。「カジカガエルが減った」という一町民の声が町長や町議会に届いた。実際はどうかと調査研究が始まった。議会の企画室に机を設け、小学校に多くの飼育用具が整備された。“素晴らしい自然を後世まで伝えたい”という町民の気持ちがNHKや国土交通省に届き、活動の幅が広がった。35年間にわたる富士町役場・国交省・小学校・北山少年自然の家・森林学習館などの連携の経緯について報告する。

8. 佐賀平野の水草 30年間の推移～絶滅危惧種と外来種を中心に～

上赤博文

佐賀県の水草研究が本格的に行われるようになったのは1991年以降で、佐自研がスタートした1993年とほぼ時期を同じくする。新しく見つかった在来水草はオグラコウホネ、ガガブタ、ミズキンバイなどの絶滅危惧種が多く、一方で新顔の外来種は外来アゾラ、コウガイセキショウモ、ナガエツルノゲイトウ、ブラジルチドメグサなど大半がクリークで猛威を振るっている侵略的外来種である。サンショウモやアカウキクサなどはおそらく絶滅である。30年間で水辺の環境がどう変わり、水辺の植物がどう変化したかを紹介する。